

平成三十一年度

国語問題 (L)

前期日程

〔注意〕

- 1 問題冊子および解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 2 受験番号は、解答用紙の受験番号欄(計八か所)に正確に記入すること。
- 3 問題冊子のページ数は、表紙をのぞき十六ページである。脱落している場合はただちに申し出ること。
- 4 解答用紙は四枚である。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 5 解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。
- 6 問題冊子の余白は適宜下書きに使用してよい。
- 7 解答用紙は持ち帰ってはいけない。
- 8 問題冊子は持ち帰ること。

I

次の文章は、十七世紀フランスの思想家パスカルが書き残したものを集めた『パンセ』の一節についての解説です。これを読んで後の問いに答えなさい。なお、二字下げである部分は、『パンセ』からの引用です。

パスカルにとって、人間の自己愛の第一の特性は、欠陥だらけである自己の真実の姿を、自分にも他人にも隠すことであった。その他人が私の欠点を見ぬき、それを指摘してくれる場合、彼は公正であり、その指摘は私の益になるはずだが、私はそのようなふるまいに嫌悪感を抱く。私は彼が正義であるよりは、彼が不正であっても、私を喜ばせてくれることを望むからである。パスカルは、このような私の悪を「自発的錯誤」^(a)と呼んでいる。

たしかに、欠陥に満ちていることは悪ではあろう。しかし、欠陥に満ちていて、それを認めようとしなないのは、なお大きな悪である。なぜなら、それは、そこに自発的な錯誤という悪をさらに加えることになるからだ。

私の「自発的錯誤」への欲求は、すぐに叶^{かな}えられる。なぜなら、相手もまた私に嫌われるよりは、私に好かれるほうが心地よいからだ。正直に本音を告げて相手を不快にするより、世辞でその場をしのごうが心理的なフタ⁽¹⁾ンも小さい。

以上のことから、人がわれわれから愛されることになんらかの利点があるような場合、その人は、われわれにとって不快だとわかっている世話を焼くのを避けるようになる。人はこちらが思うとおりに遇してくれるものだ。われわれは真理を憎んでいるので、人はわれわれから真理を隠してくれる。われわれがほめてほしいときには、人はほめてくれるものだ。われわれはだまされるのが好きなので、人はだましてくれるのだ。

また、同じように、私も他者に対して、その真実の姿を暴き立てたりはしない。とりわけ相手が目上の人や権力者である場

合には、私は相手の気分を害さないように細心の注意を払う。相手のことを考えれば、ときには言動をキョウセイしてやることも必要なはずなのに、私は相手をもつぱらほめそやし、うまく取り入って、あわよくば身分や富の保証を得ようとする。こうして、高位者であればあるほど、それだけ多くの人々の阿諛追従を浴び、決しておのれの真実の姿を見つめることはない。

そのようなわけで、幸運によって世間で高い地位に恵まれる者は、その地位が高ければ高いだけ、真理からますます遠ざかることになる。なぜなら人は、相手から好まれることが有利になり、嫌われることが不利になる場合、その相手を傷つけることを恐れるからだ。ある君主がヨーロッパ中の笑いものになっているのに、本人だけが知らないということがあったとしても、私は驚かない。真理を告げると、告げられた相手には益をもたらずが、告げる側は、相手に嫌われてしまうので、損をこうむることになる。そこで、君主のそばで生活する人々は、自分が仕える君主の益よりも自分の益のほうを尊重するので、自分たちが損をしてまで相手に益を与えようなどとは考えないのである。

したがって、私と他者は相互に錯誤を求め、与え合っている。第一に、私は自分をだましてくれる他者のおかげで、自分の欠陥を直視せず、美化された姿を真実だと思ひこむ。第二に、私も同様に、他者の短所には目をつむり、相手に自分が実際以上に優れた存在であると思ひこませる。このとき、私も他者も、互いに相手に感謝し、それに報いようとさえするが、実は両者とも、そのようにふるまうのは、相手の益ではなく、自分の益のためにすぎない。

こうして、人間の生涯とは、たえざる幻想にほかならない。人は互いにだましあい、互いにへつらいあっているにすぎないのだ。われわれがいるところで、いないときと同じようにわれわれについて語る者は、誰もいない。人間同士のつながりは、こうした互いの欺瞞の上にか成り立たない。もし誰もが、自分のいないところで友人が自分について語る内容を

知っていたとしたら、たとえその友人がいかに誠実に、公平に語っていたとしても、ほとんどの友情は持続しないだろう。

人々は互いに相手の偽りの姿を真実と信じこませようと努める。社会生活を成り立たせているのは、このような普遍的な相互欺瞞である。この現象が安定的に機能するかぎりにおいて、社会は平和に維持されるだろう。だが、この共同幻想はきわめてもろいものである。なぜなら、私はAの前ではAをほめるが、A以外の人物の前では、つい油断してAの欠点について語るからだ。それは即座にAに伝わり、相互欺瞞がハタンする。

ところで、その私の本音は、単なる悪口ではなく真実を含んでおり、本来ならAが聞き入れればAの益になるはずのものである。だが、Aは私に感謝するどころか、敵意を向ける。真実はこうして、共同体のチツジヨにひびを入れる。

つまり、人間は、自分自身に対しても、他人に対しても、偽装、虚偽、偽善にほかならない。だから、人から真実を言われることを望まないのであり、他人に対しても真実を語らない。^(c)正義と理性からかくも隔たったこのような傾きはすべて、人間の心に生来根ざしているのである。

人間の邪悪なありようを描くとき、パスカルの筆はひときわ冴えわたる。⁽⁵⁾「スウコウなる人間嫌い」^(*)（ヴォルテール）と呼ばれるゆえんである。

（山上浩嗣『パスカル『パンセ』を楽しむ』による）

*ヴォルテール——十八世紀フランスの哲学者・文学者。

問一 傍線部(1)～(5)を漢字になおしなさい。

問二 傍線部(a)「自発的錯誤」とは、どのようなことをいうのか、わかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部(b)「相手の益ではなく、自分の益のためにすぎない」とは、どのようなことをいうのか、本文中で述べられている「益」には二通りの意味があることをふまえながら、わかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部(c)「正義と理性からかくも隔たったこのような傾き」とあるが、この「傾き」とはどのようなものか、またそれはなぜ「正義と理性」から隔たっていると見なされるのか、わかりやすく説明しなさい。

II

次の文章は、柏原兵三の小説『長い道』の一部です。太平洋戦争末期、国民学校（今の小学校に相当する）五年生の杉村潔（「僕」）は、東京から富山の漁村に疎開してきました。潔は、級長の竹下進を中心とした村の子供たちの中に溶けこめないうです。次の文章は、潔が風邪で一週間欠席した後、再び登校した場面です。これを読んで後の問いに答えなさい。

教室に入ると、僕は次々と見舞の言葉をかけられた。誰も口を利いてくれなかった一週間前のことを考えると、信じられないような変りようだった。

「*縄ないの時に意地悪した野沢さえも、わざわざ僕のそばを通り過ぎる時に、「もういいがか」と声をかけていった程だった。川瀬も、角力の強い平尾も、言葉をかけにわざわざ寄って来た。勝だけが「東京者は弱いのか」と揶揄するようにいったが、それもまたきわめて勝らしい見舞の言葉だということが僕には分った。

進の登校を待つて講堂で行われるあの軍艦遊戯に似た遊びをしに、みんなが教室を出ようとした時、鐘が鳴り、先生の姿がまもなく廊下に現われた。

先生はいつもと違ってうしろの出入口から入って僕のところへやって来た。

「もういいがですか」と先生はやさしい声で訊ねた。

「はい」といつて、僕は立上り、前の晩に伯父に頼んで半紙に墨で書いてもらった欠席届の入った封筒をランドセルから急いで出して先生に差出した。先生は怪訝な顔をしてそれを受取ったが封筒の表に書かれた「欠席届」という字を読むと、軽うなずいて教壇の方へ歩いて行った。

その日は楽しかった。休み時間にはみんなについて講堂に行き、遊びには加わらないで見物に廻ったが、それはまだ病み上りで、遊びに加わって元気に走り廻れる自信がなかったからだ。除け者にされて立ちん棒をしているのと、それは何という相違だったろう。同じ立って見ているのでも、気持の上では天と地程の違いがあった。

次の日も僕には行き帰りと進の隣の場所が与えられた。しかし相変わらず話をさせられた。

「怪人二十面相」に引き続いて「大金塊」の物語を。けれども僕は努めてこう思おうとしていた。——僕は進と仲のいい友達になつたのだ。仲のいい友だち同士として進に話をしていゝのだ。進に命令されて、進の御機嫌を損じないために話をしていゝのでは断じてない……

その日の帰り道線路を越えてまもなく僕の話は終りになった。

「面白かつたわ」

と進は僕をねぎらうようにいった。

「その明智探偵ちゆう奴は偉い奴やのう、竹下君」と山田がいった。

「ああ、そうやな」

「その明智探偵つて今でもおろるか、竹下君」と秀がいった。

進は呆れたようにいった。

「汝ア、何いうとらあ、小説の話じゃが」

秀はシュンとなつて黙つてしまった。

「まだほかにも明智探偵の出て来るのがあつたらう」と進が僕にいった。

「うん、まだ、大分あるね」

「どんな奴よ、いうてみいま」

「〈少年探偵団〉だとか、〈妖怪博士〉とかね」

「その〈少年探偵団〉つていゝの、話してくれんか」

「いつから」

「今からよ」

「ちよつと疲れたなあ」

「じゃあ、あしたでもいいわい」と進は少し不機嫌な声でいった。

「そうしてくれよ」

しばらくの間、みんな黙ったまま歩き続けた。幸いなことに、話をしなくなっただけから、進の隣という僕の場所はそのままにしておかれた。

善男が沈黙を破った。

「なあ、竹下君」

「何よ」と進がまだ不機嫌の残っている声でいった。

「潔はよう職員室に呼ばれるなあ」

その日の昼休みに僕は職員室にいる先生のところへ呼ばれて、病気で一週間も休んだことを心配した先生にいろいろ聞かれたり、注意を与えられたりしたのだ。しかし職員室に呼ばれたのはこれで三回に過ぎなかった。

「そうやのう」と小沢がいった。

「愚員やもんに」と秀がいった。

「愚員やもんに、仕方ないわいのう」と善男がいった。

「止めんかい」

突然進が強い声でいった。

善男が驚いたように進の顔色を窺った。

「職員室に呼ばれるのが、そんなに気にならあ。俺など嫌でも毎日職員室に行かねばならんがえぞ」
進は最後に冗談めかしく流して、僕の方にあの含羞んだ笑いを浮べた顔を向けていった。

「やっぱり（少年探偵団）とかいうのしてくれんか」

「うん」と僕は窮地から救われたような気持で返事をした。

十字路で西浜見の小沢と秀がいなくなってしまうと、それまで列に加われずにみんなより少し速足で横列の前に躍り出るようにして歩いてきた善男と、みんなのうしろからとぼと歩いてきた、青湊あおぼなを垂らしていいことのない一郎とが、列の端に加わることができた。道幅一杯に進と僕を中心にして完全な一列横隊が組まれていた。

「これだったら誰に会ってもはずかしくない、と僕は考えていた。十字路を過ぎてしばらくしてから進の指示で話は中断したけれども、依然として僕は進の隣の場所を占めていた。これだったら伯父さんに会っても、美那子のお母さんに見られてもはずかしくない……」

風呂屋の前を通り過ぎ、雑貨屋の南を曲った途端に、善男が低い声で、

「松の姉さまがおらすじゃあ」といった。

松の顔がみるみるうちに赤くなった。

「松の姉さんは家の前の石橋の欄干すゐに坐すわって、じつと川の流れを見ているところだった。白い、長いうなじがまぶしかった。

誰かに似ている、と僕は思った。そして通りがかりに彼女の横顔をそつと盗み見た時、彼女が大人の講談本*で読んだ「朝顔日記」の挿絵に出て来る熊沢蕃山くまざわはんざんの恋人の朝顔に似ていることに気がついた。東京で本に飢えていた僕は、大人の講談本を友達に貸してもらって読んだことがあったのだ。初めて恋という言葉を知ったのもその「朝顔日記」を読んだだった。その挿絵にあった朝顔の顔が、松の姉さんによく似ているのだ。「朝顔」と僕は心の中で松の姉さんのことを呼んでみた。その講談の朝顔に恋心を覚えたように、今僕は間近にいる朝顔にも仄ほのかな恋心を覚えた……

進の声が僕を夢心地から覚した。

「あした、少しでもいいから持って来いま」

「何を」

「分らんがか」と山田がいった。

「朝、汝おれが話しとつた菓子のことよ。そうやろう、竹下君」

進はそれに答えずにきまり悪そうに笑いながら繰り返した。

「あした少しでもいいから持って来いま」

「ああ、花林糖かりんとうのことかい」

進は言訳をするようにいった。

「おれの説明だけでは分らんにか。少し持って来て、実際に食べさせてくれんことにや」

「そうだね、じゃ、少し持って来よう」と僕は進の要求を無理からぬたのみと納得しようとして一生懸命努力しながらいった。いつの間にか僕の家へ折れる道の角まで来ていた。

「さようなら」と僕はいったが、誰もそれに答えないで行ってしまった。

「なあ、潔」

今日は僕と一緒にやって来た磯介が声をひそめるようにしていった。彼はいつもはたいてい近道をとるために十字路で別れてしまうのだったが、今日は僕の「少年探偵団」の続きを聞きたくてこっちへまわったのだ。せっかくまわったのに話を中絶してしまったのを僕は彼のために気の毒に思った。

「俺にも、その花林糖とかいう菓子、少し食べさせてくれんか」

「もちろんだよ」と僕はいった。

「君にはもちろん上げるつもりでいるんだ。ほかにも遠足の時に、君に上げようと思っているものがあるんだ」と僕はさつきいわずなかつたチョコレートとキャラメルのことを考えながらいった。

「そうか」

磯介はしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「進にみんな取られてしまうぞ、用心せんと」

「どうして」と驚いて僕は問い返した。

「どうしてみんな取られてしまうの」

「少々な欲な奴じゃないがな」と磯介は吐き捨てるようにいった。

「遠足の時に奴はうまいものをみんな徴発してしまわあよ」

「本当かい」

「本当でなくてよ。まあ、遠足が来てみたら分るっちゃ」

磯介は、僕が彼の言葉を本当にしないでいるのが不満でならないようにいった。

「どうして、みんな、そんなことをされて黙っているの」

「除け者にされるのが怖いにか」

「……………」

僕は思い切って訊ねてみた。

「僕を除け者にしたのも本当に進なのかい」

「そうでなくてよ」と磯介はあきれたようにいった。

「それじゃあ、あの歌を作ったのも進かい」

「そうでなくてよ」と磯介は強い調子でいった。

「みんな進が糸を引いていることじゃが」

勝の教えてくれたことはやっぱり本当だったのだ、と僕は今更のように思わずにはいられなかった。

「でも、徴発されて、黙っているっていう法はないじゃないか。団結すれば進なんかには負けないだろう」

「そうは簡単に行かんがよ」と磯介は少々投げやりな調子で答えた。

「進はな、徴発した物を、強い連中に少しづつ分けてやって、子分にしとるからな」

「強い連中って誰だい」

「松とかなあ、野沢とかなあ、河村とかなあ、勝とかなあ」

「勝もかい」と驚いて僕はいった。

「ああ、勝もよ、みんな進のいい子分じゃが。遠足が来ればよう分るが」

「山田や秀や小沢も、もちろんそうだね」

「あにな奴らは弱いから、子分になるうがなるまいが、怖くはなけれどなあ」

「それに」と磯介は声をひそめていった。

「六年の級長しとる健一が力を持つている間は、誰も進には手出しができませんがよ」

「進の従兄いとこにあたる奴かい」

「ああ、そうよ、健一が卒業すれば分らんけどなあ」

しばらくして僕はいった。

「それじゃあ、花林糖のことを喋しゃべらなきゃよかったなあ」

「ほかに持つとつても、もう喋らんことよ」

「うん、そうするよ」

僕の家の前で磯介と別れると、僕は重おもい心(4)を抱いて家の中へ入った。

磯介のいうことが本当だとすれば、進をやつつけることは不可能だった。そして僕の選択できる道は二つしかないことになった。進の御機嫌を損じないようにひたすら心をつかう道が一つと、あくまで自己に忠実に振舞ふるまい、そのために除け者にされることも辞さないという道が一つとであった。自分が今どちらの道を選ぼうとしているか、僕にはもう分っていた。

*縄ない——わらなどを使って縄を作ること。

*もういいがか——もう（体調は）いいのか。以下の部分では、潔以外の登場人物は、地元の言葉を使う。

*軍艦遊戯——二組に分かれて、戦艦・駆逐艦・水雷艇という三種の役割に応じて互いを追いかけて、捕まえる遊び。土地によつて名前やルールが異なった。引用よりも前の場面で、この土地のやり方を初めて見た潔は「荒々しい格闘ゴッコのようなもの」だと感じている。

*怪人二十面相——江戸川乱歩の少年向け推理小説。明智小五郎探偵が活躍する。「大金塊」「少年探偵団」「妖怪博士」も同じ。

*汝わね——お前。

*講談本——寄席演芸の一つである講談の物語をまとめた書物。「朝顔日記」は、熊沢蕃山と朝顔との悲恋を描いた講談。

*級長——児童の中から選ばれる学級の長。旧制の学校では多くの場合、模範的な児童がリーダーとしての役割を期待され、担任から任命された。

問一 傍線部(1)「僕は努めてこう思おうとしていた」とあるが、それはなぜか、わかりやすく説明しなさい。

問二 傍線部(2)「きまり悪そうな笑いを浮かべながら」とあるが、この場面における進の心情を、わかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部(3)「しばらく黙っていた」とあるが、それはなぜか、この後の対話も参考にして説明しなさい。

問四 傍線部(4)「重い心」とは、潔のどのような心情をいうのか、くわしく説明しなさい。

III

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

後嵯峨法皇の、御熊野詣ありける時、伊勢国の夫の中に、本宮の音無河といふ所に、梅の花の盛りなりけるを見て、よみける。

A おとなしにさきはじめけるうめのはなにほはざりせばいかでしらまし
夫が歌には、いみじき秀歌なるべし。

この事、御下向の時、道にて自然に聞こしめして、北面の下臈に仰せて召されにけり。北面の者、馬にてあちこち打ちめぐりて、「本宮にて、歌よみたりける夫は、いづれぞ」と問ふに、「これこそ、件の夫にて候へ」と、そばにて人申しければ、「仰せなり。参るべし」と言ひける、かへりて、

B はなならばをりてぞひとのとふべきになりきがりたるみこそつらけれ

さて、かへりことにも及ばず、おめおめと馬より下りて、具して参りぬ。事の子細聞こしめされて、御感ありて、「何事にも所望申せ」と仰せ下さる。「言ひ甲斐なき身にて候へば、何事の所望か候ふべき」と、申し上げけれども、「など分に随ふ所望なかるべき」と仰せければ、「母にて候ふ者を、養ふほどの御恩こそ、所望に候へ」と、申しければ、百姓なりけるを、かの所帯の公事、一向御免ありて、永代を限りて、違乱あるまじき由の御下文給はりて、下りけるとぞ。わりなき勸賞にこそ。百姓が子なりけれども、児だちにて、和歌の道心得たりけるとぞ、人申し侍りし。

『沙石集』による

*夫——労役のために徴発された人。 *北面の下臈——院の御所を守る下級武士。

*所帯の公事——税。 *一向御免——全て免除すること。 *永代を限りて——子々孫々に至るまで。

*勸賞——褒美。 *児だち——稚児として育てられた人。

問一 二重傍線部(1)(2)(3)の動作主(主語)を次の(ア)～(オ)から選び、記号で答えなさい。

- (ア) 法 皇 (イ) 夫 (ウ) 北面の下臈 (エ) 人 (オ) 語り手(作者)

問二 傍線部(a)(b)を現代語訳しなさい。ただし(a)は、動作主(主語)と動作の対象とを補って訳すこと。

問三 Aの歌を、掛詞の意味を示しながら現代語訳しなさい。

問四 Bの歌について次の問いに答えなさい。

- ① この歌には三か所に掛詞が使われています。すべて指摘しなさい。
② ①の掛詞をふまえて、この歌を詠んだ夫の心情を説明しなさい。

問五 傍線部(c)は誰の、どのようなことに対する、どのような気持ちを表しているか、わかりやすく説明しなさい。

IV

次の文章は「言（口伝）と「書（書物）」の関係について論じたものです。これを読んで後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した箇所があります。

古者、有亡書、無亡言。南人之言、孔子取之、夏諺之言、晏子誦

焉。而孔子非南人、晏子非夏人也。南北異地、夏周殊時、而其

言猶伝、未必垂之策書也、口伝焉而已矣。故秦人之火、能及漆

簡、而不及伏生之口。

然則言与書、孰堅乎哉。言雖堅而言者有_二時亡_一也。言者亡、則

言亦有_レ時而不堅也。書又可_レ廢乎。書存、則人誦、人誦、則言存、

言存、則書可_レ亡而不亡矣。書与言、其交相存者歟。

（宋・楊万里「独醒雜志序」による）

*夏諺——夏（前一九〇〇年頃）の時代のことわざ。

*晏子——晏嬰。春秋時代、斉の宰相。

*誦——唱える、読む。または、唱え読むことで伝える。

*周——姫氏の建てた王朝。前一〇〇〇年頃〜前二五六年。西周と東周に分かれ、春秋時代は東周の時代にあたる。

*垂——書き記して後世に伝える。 *策書——竹簡に書かれた書物。

*秦人之火——秦（前二二一年〜前二〇六年）の始皇帝による焚書をいう。

*漆簡——漆を用いて竹簡に書かれた書物。

*伏生——秦末漢初の学者伏勝。焚書に抗して儒学の文献を口伝により伝えた。

*又——語調を強める語。

問一 傍線部(1)「有亡書無亡言」を現代語訳しなさい。

問二 傍線部(2)「南北異地、夏周殊時、而其言猶伝、未必垂之策書也、口伝焉而已矣」とはどのようなことをいうのか、現代語訳した上で、わかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部(3)は「よくしつかんにおよぶも、ふくせいのかちにおよぶあたは（わ）ず」と読みます。この読み方に従って、解答用紙の原文に返り点を付けなさい。

問四 傍線部(4)「孰堅乎哉」を、すべて平仮名を用いて読み下しなさい。現代仮名遣いでもよい。

問五 右の文章において、「言」と「書」はどのような関係にあると考えられているか、全体の趣旨をふまえてわかりやすく説明しなさい。